



▲上益城郡嘉島町鯉の新病院建設から8年、ポストコロナの受け入れ体制の再整備が急務だという

しかしながら、コロナ禍で団体や学校スポーツなどがほとんど中止となり、スポーツ外傷の患者そのものの存在が消失した。どう乗り切るか。回復期リハの対応も含めて当院の喫緊の課題です。ひとつはSMCの強みをどう生かすか。もう一つは回復期病棟への入院が戻っていないため急性期病院からの受け入れ体制を再整備することと鬼木院長。

4月の院長就任以降、毎週金曜日に地域連携室をはじめ全医局の担当者が集まり課題解決のミーティングを重ねた。すると72時間のタイムラグがあることが発覚した。それは急性期病院から送患の打診があっても主治医が決まらないため返答の時間が遅れ回復期病棟への入院の機会を喪失していたというもの。そこで院内での情報伝達を見直し24時間



▲東京五輪選手村診療所の整形外科医に招聘された鬼木副院長(当時)

最新病院建設から8年が経過したため医療器材の更新も進

**最新の機材、術式など導入**

以内を受け入れるというルールの下、新しい連携システムを構築した。一方、SMCではスポーツリハビリ専門のPT(理学療法士)を7人から16人体制に拡充、バスケット、サッカー、野球、陸上、格闘技と競技別に専門のPTを育成、国体やインターハイのチームに派遣帯同するなどその専門性を高めている。東京五輪で培った全国のドクターとのネットワークを生かし紹介し合う連携も強みである。



▲厚生労働省指定の運動療法施設「メディフィット回生会」。医師の処方に基づく運動療法を実施

めている。麻酔器、内視鏡の関節システム、手術台、手術用ナビゲーションなどを新しく導入。手術の術式も最新式を導入された。半月板制動術(セントラリゼーション)という変形性膝関節症の進行を抑制する術式で、切る「縫う」というこれまでの術式とは全く異なる手法だという。さらに部分人工関節なども導入し、膝の治療は初期から中期、末期まで全てのステージへ対応できるようになった。足首に関しては人工足関節、股関節に関してはデュアルモビリティの人工関節などを新たに導入するなど、ここ数年で画期的な技術革新が実現している。

<p>医療法人 回生会 リハビリテーションセンター 熊本回生会病院</p> <p>〒861-3193 熊本県上益城郡嘉島町鯉1880 TEL096-237-1133 FAX096-237-2252</p>	<p><b>診療時間</b> 9:00~17:00(平日) 9:00~12:30(土曜日)</p>
	<p><b>休診日</b> 日曜・祝日</p>
	<p><b>病棟</b> 総病棟数161床 一般病棟60床 回復期リハ病棟101床</p>
	<p><b>診療科目</b> リハビリテーション科、整形外科、内科、外科、循環器内科、脳神経内科、麻酔科(標榜医:宮本千里)、歯科、口腔外科</p>

鬼木泰成副院長が院長に  
2015年6月の新病院の建設から8年、それまでの回復期リハビリテーション機能を充実し、心大血管リハビリテ



▲毎年800症例を超える下肢関節外科の手術を実施、県下でトップクラスの施術数という

ーションの受け入れ体制強化、さらにスポーツ外傷患者の手術やアスリートのサポートを図る熊本初の「スポーツメディカルセンター(SMC)」を開設している。

**プロ、部活など専門性を高めるスポーツメディカルセンター(SMC) リハビリ拠点病院としての受け入れ体制を強化**

**医療法人回生会 リハビリテーションセンター熊本回生会病院**

今年4月1日からは鬼木泰成副院長が院長に就任した。大橋浩太郎理事長兼院長は理事長に専任、中村英一院長補佐が院長を支える新体制がスタートしている。鬼木院長は鬼木泰博前会長(故人)の次男で新病院の開院時に熊本大学病院整形外科医局長から同病院の診療部長に着任している。スポーツ外傷の中でも難しいとされる膝前十字靭帯損傷の再建手術など靭帯・軟骨損傷に対する最新手術で数多くの実績をあげる県内でも屈指の整形外科専門医だ。日本スポーツ協会公認スポーツドクターでもある鬼木院長は熊本ヴォルターズのチームドクターも務め、プロのアスリートからジュニアの部活、シニアの生涯スポーツまで幅広く対応している。昨年の東京五輪では、スポーツ医学の実績から選手村総合診療所の整形外科医として招聘されている。



同病院で毎年800症例を超える手術を2人で実施しており、これは下肢関節外科では県下トップクラスの手術症例数を誇る。

**膝関節手術では 県下トップクラスの施術症例数**

スポーツ外来を中心とした整形外科の拡張に対応するため2019年には熊本大学病院整形外科から中村英一医師を同病院の院長補佐に招聘した。同医師は、大学病院時代、整形外科診療科長兼講師として、また、膝・足関節診療班のチーフとして、25年以上にわたり手術や臨床研究に従事してきた実績を持つ。鬼木院長とは熊大時代タッグを組んできた仲でもある。